

### 古期英語詩『ベーオウルフ』の成立時期について

IWAYA, Michio / 岩谷, 道夫

---

(出版者 / Publisher)

法政大学キャリアデザイン学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学キャリアデザイン学部紀要 / 法政大学キャリアデザイン学部紀要

(巻 / Volume)

6

(開始ページ / Start Page)

21

(終了ページ / End Page)

39

(発行年 / Year)

2009-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00007348>

---

---

# 古期英語詩『ベオウルフ』の 成立時期について

法政大学キャリアデザイン学部教授 岩谷 道夫

---

---

## 1.

古期英語による作者未詳の叙事詩 *Beowulf* 『ベオウルフ』は、その成立がいつであったか、明らかでない。そこでその成立時期について、これまで、7世紀説、8世紀説等、様々な説が提示されてきた。そして、20世紀前半に R. W. Chambers チェインバーズ、Fr. Klaeber クレーバー等によって、8世紀前半成立説が提唱され、それがほぼ定説とされている。しかしながら近年、『ベオウルフ』の成立が、8世紀前半よりもさらに後代であるとする諸説が現われた。例えば、1980年代に、その成立を10世紀の前半であるとする J. D. Niles ナイルズ、そして、さらに11世紀前半であるとする Kiernan キアナンの説が現われ、それぞれ重要な観点を提供している。本稿では、『ベオウルフ』の成立時期について、まず定説と新説を具体的に取り上げながら、諸説の見解を吟味したいと思う。ところで、1960年代に、『ベオウルフ』の故国 Geatas イェーアタスについて、斬新な仮説を提示した歴史家に J. A. Leake リークがいる。そのリークの説の中に、『ベオウルフ』の成立時期の確定について、重要な示唆を与える記述が見出される。一方『ベオウルフ』の、とりわけ「フィン王の挿話」に現われるゲルマン人部族 Eotan エーオタン（ジュート）が、一つの重要な関与を持つものと推測される。また、古期英語における最古の詩 *Widsith* 『ウィードシース』にも、ジュートに関する示唆的な表現が見出される。そこで本稿は、『ベオウルフ』の成立時期について、定説と様々な新説を検討し、リークの説に触れながら、『ベオウルフ』の「フィン王の挿

## 22 法政大学キャリアデザイン学部紀要第6号

話』と『ウィードシース』におけるエーオタンを手がかりに、あり得べき妥当な見解を追求したいと思う。

## 2.

『ベオウルフ』は、唯一の写本を通してしか伝えられていない。大英博物館の the Cottonian collection の中の一冊で、Vitellius A. xv. として知られている巻本である<sup>(1)</sup>。Sir Robert Cotton が17世紀に入手した『ベオウルフ』の写本は、紆余曲折を経て、デンマーク人の G. J. Thorkelin が1787年に筆写し、1815年に公刊した。それが *Beowulf* の最初の刊本となった。写本の内容は、古期英語によって書かれた3182行からなる大部の叙事詩であった。それは、12世紀の中期高地ドイツ語による『ニーベルンゲンの歌』と並ぶ、中世初期のゲルマン人に関する叙事詩で、またその成立時期の古さから、歴史的文献としての重要性を持っている。物語は、ゲルマン人国家 Geatas イェアタスの *Beowulf* ベオウルフを主人公とし、二つの部分に分かれている。第一部が、ベオウルフが、イェアタスの友邦国家である Dene デネからの要請で、デネを危機に陥れていた怪獣 Grendel グレンデルとその母親を退治し、故国に凱旋する物語（1～2199行）で、第二部が、故国に帰ったベオウルフが国王となり、数十年後故国イェアタスに危機をもたらした龍を退治し、しかし自らも深手を負い、悲劇的な最期を遂げるという物語（2200～3182行）である<sup>(2)</sup>。発見された写本は、字体から10世紀末ごろに作成されたものとされていたが、現在では、1～1938行までの部分が12世紀、1939～3182行が10世紀の写本と考えられている<sup>(3)</sup>。写本をもとに、『ベオウルフ』の原著が、いつごろ成立したかについて、様々な説が提示されてきた。成立時期の論点になったのは、当然のことではあるが、イングランドの歴史との関係である。

中世初期のイングランドを形成したのは、ヨーロッパ大陸のゲルマン人諸部族の中の、アングル、サクソン、ジュート、そしてフリージアンであった<sup>(4)</sup>。それらの諸部族は、5世紀半ば以降、先住のケルト人を西方および北方に追いやり、ブリテン島に、アングロ・サクソン七王国と呼ばれる諸国家を建設する。6世紀のブリテン島に居住していたウェールズ人のカトリック僧ギルダスは、ブリテン島へ侵入したアングロ・サクソン人を、「人間と神にとって憎む

べき存在」と記述している<sup>(5)</sup>。ちなみに、その時サクソン人の侵攻に対峙して、先住のケルト人の領域を死守しようとした英雄 **Ambrosius** アンブロシウスの伝承は、後に中世ヨーロッパ全域で、アーサー王伝説として伝えられた<sup>(6)</sup>。アングロ・サクソン七王国は、順次繁栄を極めたが、盛衰を経て、8世紀の後半、**Danes** デーン人が襲来し、その諸王国は、大部分がデーン人に支配される。唯一残った南西部ウェスト・サクソンの **Wessex** ウェセックス王国 **アルフレッド** 大王により、デーン人は、テムズ川以北の地に押し戻される。最終的に878年の **Wedmore** ウェドモアの協約により、デーン人は、カトリックに改宗することを条件に、後に **Danelaw** デーンローと呼ばれる自治領を与えられ、イングランドの支配下になる。

『ベオウルフ』の成立時期については諸説が主張されたが、重要な論点は、デーン人の侵入の時期との関係であった。当時イングランドでデーン人と呼ばれていたのは、今日のデンマーク人を中心とした、時にはノルウェー人を含む北方のゲルマン人であった。そのデーン人の侵入は、**アルフレッド** 大王の時代に編纂が始められた『アングロ・サクソン年代記』によれば、西暦787年に始まり、878年のウェドモアの条約のころまで、一世紀ほど続いた<sup>(7)</sup>。『ベオウルフ』では、デネすなわち今日のデンマークが、その前半の物語の舞台となっている。そこでは、主人公ベオウルフは、友邦国家を救うためにデネに向かい、ベオウルフの故国 **イェアタス** とデネとの友好関係、そしてデネの王朝の正統性が、何度も強調されている。そうであれば、イングランドへデーン人の襲来した時期に『ベオウルフ』が成立したと考えるのは困難になるであろう。その点については、諸研究家の見解は一致し、『ベオウルフ』の成立時期は、787年以前と878年以降の二つの時期のいずれかということになった。従来は、『ベオウルフ』の古期英語の写本の文体の古さ、描かれた世界の時代性、その他諸々の理由により、大方の研究者は、787年以前の成立を主張し、8世紀半ば、8世紀前半、7世紀後半等の説が主張された。1939年にイングランドのサフォーク州、**Sutton Hoo** サットン・フー地区の沖の英仏海峡で、中世初期の船が発見され、その船は、7世紀のイングランドで建造されたものと推測された。その船の構造や装備品等が『ベオウルフ』の冒頭部分の船についての描写と重なる点が多く、それを『ベオウルフ』の7世紀成立説

## 24 法政大学キャリアデザイン学部紀要第6号

を裏付けるものとする見解も現われたが、『ベオウルフ』の早期成立説の決定的な証拠とまでは至っていない<sup>(8)</sup>。

『ベオウルフ』には、いくつかの挿話があるが、その他に、物語の時代以前の出来事について言及されている箇所がある。その一つに、ベオウルフの祖国 Geatas イェアタスの国王 Hygelac ヒエラークの最期についての言及がある<sup>(9)</sup>。ヒエラークは、『ベオウルフ』では、フランク王国の北海沿岸地域に遠征し、そこでフランク、フリースラン人の連合軍に撃破され、敗死したと伝えられている。ところが、そのヒエラークの遠征は、6世紀のフランク王国のトゥールのグレゴリウスの『フランク史』にも言及され、ヒエラークは、コキライクス、もしくはクロキライクスとして登場する<sup>(10)</sup>。そのトゥールのグレゴリウスのコキライクスが、『ベオウルフ』のヒエラークであるということは、最初にデンマークのグルントゥヴィーによって指摘された<sup>(11)</sup>。トゥールのグレゴリウスの中のコキライクスの遠征は、西暦521年ごろとされているので<sup>(12)</sup>、ヒエラークがコキライクスであれば、『ベオウルフ』は、521年以降の成立ということになる。

一方、『ベオウルフ』の中に、キリスト教についての言及が見出される。例えば、ベオウルフが戦う怪獣グレンデルは、カインの種族とされ<sup>(13)</sup>、『ベオウルフ』のところどころに、キリスト教の神についての言及がなされている。従って、『ベオウルフ』の成立は、イングランドへのキリスト教布教以後ということになり、具体的には、597年のローマ法王グレゴリウスI世の命による、アウグスティヌスを中心とした、イングランドのケント王国における修道僧の布教活動の開始以後ということになる<sup>(14)</sup>。

以上のような点は、研究者の間の共通認識となった。その後、チェインバーズ、およびクレーバーという英米の最も有力な二人の『ベオウルフ』研究者の主張を通して、8世紀初頭～前半の成立が、ほぼ定説として確立したのである。チェインバーズは、幾つかの音韻変化による証拠を挙げ、また Morsbach モールスバッハの検証に、ある程度の意義を認めているが、それが『ベオウルフ』の成立時期についての決定的な論拠となるわけではないとも述べている<sup>(15)</sup>。しかしながらチェインバーズは、別の箇所でも、旧来の説に対する批判に対して極めて断定的に、次のように述べている。「……それは、主に文法上

のおよび韻律上からの考察に基づいた、『ベオウルフ』を8世紀はじめの所産であるとする、古くからの見解を捨て去る論拠には全くならない。」<sup>(16)</sup>。

一方、クレーバーは、『ベオウルフ』以外の、他の古期英語詩、*Genesis*, *Daniel*, *Exodus* そして Cædmon キャドモンの詩を700年ごろ、Cynewulf キューネウルフの詩を8世紀後半と考えると、『ベオウルフ』は、8世紀前半の成立が妥当であり、そしてそれが言語上の証拠にも合致していると述べている<sup>(17)</sup>。また、クレーバーは、モールスバッハの説を援用し、8世紀の前半に、アングル人の宮廷とデンマークの王国に、婚姻を通じて、親密な関係があったとする。しかしながら、クレーバー自身が述べているように、そのような事柄を明らかにする、具体的な歴史文献は存在していない。いずれにせよ、決定的な証拠は存在してはいないが、チェインバーズ、クレーバーという有力な研究者の主張により、『ベオウルフ』が、8世紀前半の成立ということになったのである。

### 3.

以上のような定説に対し、その後いくつかの新説が現われた。次に、1980年代に提示されたナイルズとキアナンのそれぞれの説について、見ていくことにしたい。

ナイルズは、『ベオウルフ』について、包括的な内容の研究書を著わし、その中で、『ベオウルフ』の韻文の構造を中心に、様々な面からの地道な研究成果を紹介した<sup>(18)</sup>。ナイルズは、まずチェインバーズの説の音韻面での論拠を、Amos アモスによる研究を援用して批判した後、Schücking シュッキングの説を紹介する<sup>(19)</sup>。シュッキングは、イギリスでチェインバーズが、後に定説となる主張を展開していた20世紀前半に、ドイツで、当時としては画期的な内容の説を表わしていた。シュッキングは、チェインバーズとは異なり、『ベオウルフ』の成立時期を、10世紀の前半としていた。シュッキングは、通説の8世紀前半成立説の音韻面での根拠を批判し、その成立理由を、デーンローに居住していたスカンジナビア出身の王族が、高名なイングランド人の詩人を雇い、英語での教育がなされることになっていた息子に対し、道徳上の教育を目的とした叙事詩を創るように要請したことによる、とした。ナイルズ

## 26 法政大学キャリアデザイン学部紀要第6号

は、シュッキングの10世紀前半の成立説に共鳴しつつも、その成立理由については、首肯していない。ナイルズは、それについて、根拠のない推測という点で、モールスバッハ等によって主張された通説の成立理由とあまり変わらないとする<sup>(20)</sup>。ナイルズは、自らの10世紀前半成立説の理由に、デーンロー地域における Anglo-Scandinavian audience の存在を挙げる<sup>(21)</sup>。Anglo-Danish kingdom となったイングランド、とりわけデーンロー地域では、10世紀前半の Athelstan アゼルスタン王の時代に、アングロ・サクソン人とデーン人の間に、良好な関係が実現するようになり、その二つの人民の共存、融合が進み、王族の間にも婚姻関係が生じるようになっていた。『ベオオウルフ』の冒頭の、Scyld シルド、Beow ベーオウといった国王の葬送の儀式に見られるような、デーン人の王室の系統についてのイングランド人の強い関心、Beda ベーダの『英国民教会史』や『アングロ・サクソン年代記』で最初にイングランドに移住したジュートの首長とされている Hengest ヘンジェストが、『ベオオウルフ』の「フィン王の挿話」では、デーン人として言及されている点、等は、イングランドにおけるデーン人の移住、定住以前の状況では、考えられない、とする<sup>(22)</sup>。ナイルズはまた、『ベオオウルフ』は、デーン人について、賞賛と批判の二律背反的な視点で描かれていると指摘する<sup>(23)</sup>。例えば、『ベオオウルフ』の冒頭部分で、デーン人の王統をアングロ・サクソンの王統とつなげ、それを称える一方で、デーン人の国王フロースガールとその重臣達の無力さを如実に叙述している。ナイルズは、デーン人に対するイングランド人のそのような観点は、post-Viking age においてこそ一般的なものであり、つまり、デーンロー地域でデーン人の定住が進み、デーン人とアングロ・サクソン人の双方からなる audience が実現するようになったからこそ、そのような二律背反の視点が存在するとする。そしてそのような audience は、特に、Athelstan アゼルスタン王の時代、即ち、925年以降の第二四半世紀に最も広範に存在したと考え、その時期に『ベオオウルフ』が成立したとするのである<sup>(24)</sup>。ナイルズのその『ベオオウルフ』におけるデネについての二律背反的な描写という指摘には説得力があるが、『ベオオウルフ』の成立時期としての925～950年という時代の提示については、時代背景からそのような可能性もあり得るとしても、確言するには、さらに多くの資料による検証が必要と思われる。

次に、キアナンの説であるが、『ベオウルフ』の写本の入念な検討を通して、キアナンは、『ベオウルフ』の写本の制作された時期が、すなわち『ベオウルフ』の成立した時期と考えた<sup>(25)</sup>。写本の作成時期と原著の成立時期を同一としたのである。またその時期を、1016年以降のデン人人のイングランド支配の時代であるとした。それまでキアナンによってほど綿密な写本の分析は、なされたことはなかった。音韻、形態、統語法、語彙の各側面からの従来<sup>の</sup>諸説に対する検討と批判は、十分に説得力のあるものであった。キアナンによって、1016年からのデンマークの Cnut クヌート王時代に『ベオウルフ』が成立した可能性も存在し得ることになったのである。キアナンは、『ベオウルフ』の冒頭の、デネの王家に対する賛辞は、アングロ・サクソンのイングランドにおいては不自然であり、また、アングロ・サクソン王朝のもとでは困難であるとする。そのような描写が唯一可能なのは、デンマークがイングランドを支配したクヌートの治世であるとして、『ベオウルフ』の成立時期を、その時期に設定したのであった。確かに、『ベオウルフ』の成立がクヌートの時代であったならば、デネの王朝についての賛辞は自然なものとなり、また『ベオウルフ』に、オッフア王の挿話の部分を除いて、アングロ・サクソン人が登場していないことも、むしろ当然のこととなるであろう。ただ、デネは『ベオウルフ』の中で、必ずしも賛辞のみを呈されているわけではない。ナイルズの見解にあったように、デネは、国王フロースガールを始め、その重臣達が、怪物グレンデルの襲来に対し、友邦国家に救いを求める他に、何の方策も見出せなかったからである。新たにイングランドを支配したデンマークのクヌート王にとって、『ベオウルフ』におけるデネのあり方は、望ましいものであったとは、到底考えられない。『ベオウルフ』において、デネに対して全面的な賛辞が呈されていないのであれば、賛辞と批判の双方が存在する二律背反的状况としたナイルズの観点に、より説得力があるように思われる。

以上、定説に対して新しい観点を提示した、ナイルズとキアナンの説について触れてきた。次に、全く別の観点から『ベオウルフ』の成立時期に関する説を提示した、リークの説を検討することにした。

## 4.

1960年代後半に、アメリカで、『ベオウルフ』の研究史において画期的な著書が現われた。J. A. Leake リークによる *Geats in Beowulf* である<sup>(26)</sup>。Geats とは Geatas の現代英語表記であり、Geatas イェーアタスは、古期英語のより古い時期にはゲアタスと呼ばれていたが、その後の音韻変化の palatalization 口蓋化により、イェーアタスとなった。それは、前述のように、ベオウルフの故国であり、スカンジナビア半島の南端、今日のスウェーデンのイェーテボリの存在するところに、中世前期に存在していたと考えられるゲルマン人の国家である。

リークは、『ベオウルフ』の Geatas は、中世西洋に広く見られる Getae 伝説に基づくものであると考えた。つまり、Geatas は、伝説の北方の大国のラテン語表記 Getae の OE 訳とし、Goths, Danes, Jutes 等の全体を漠然と表わす名称で、また『ベオウルフ』の Geatas は、その Getae 伝説に基づいて構想された、架空の国家であるとした<sup>(27)</sup>。確かに古代から中世にかけて、ギリシア、ローマの文献に、Getae と呼ばれる北方の国家が言及され、それが広い範囲で伝説の強国として伝えられていた。それが、イングランドにおいて Geatas となり、『ベオウルフ』の中の、虚構の国家となったという説は、一つの仮説としてはあり得る。しかしながら、スカンジナビアには、中世初期に、Gautar と呼ばれる国家が実際に存在していた。Gautar を、ゲルマン語の音韻対応の法則により、古期英語で表わせば Geatas となる。例えば、古期英語の最古の詩 *Widsith* 『ウィードシース』には、Geatas という国家が、Goths, Dene, Jutes とは別個の国家として、Sweon, Suthdene とともに併記されていて、それがスカンジナビアの国家と推測されるような表記となっている<sup>(28)</sup>。リークは、その『ウィードシース』の Geatas が、スカンジナビアの実在の国家であるという認識は持っていたが、それを『ベオウルフ』の Geatas とは考えなかった。あくまで『ベオウルフ』の Geatas を、中世ヨーロッパに伝わる伝説の国家 Geatas の古期英語表現であり、架空の国家としたのである。リークは、『ベオウルフ』では Geatas の国王とされているヒエラークが、トゥールのグレゴリウスの『フランク史』では、デーン人の国王となっている、等<sup>(29)</sup>、の理由からも、『ベオウルフ』のイェーアタスを、架空

の国家としたのである。実際には、前述のように、スカンジナビアには古期英語で *Geatas* と表記される国家が存在していたのであるが、リークは、そのスカンジナビアの国家と、『ベオウルフ』の *Geatas* との関係については、十分に言及を費やそうとはせず、その点においては、説得性における不足を否定できない。

一方リークは、『ベオウルフ』のイェーアタスの実体を追求することを通して、『ベオウルフ』の成立を、通説の8世紀前半より後の時代であると主張していた<sup>(30)</sup>。前述のようにリークは、イェーアタスを、中世ヨーロッパで広く知られた伝説的な北欧の国家のラテン名 *Getae* を古期英語に直したものであるとし、西洋中世の文献の中の *Getae* と『ベオウルフ』の *Geatas* イェーアタスとの関連性を見出そうとした。そしてその過程で、通説である『ベオウルフ』の8世紀前半成立説を批判し、10世紀以降の成立の可能性を示唆したのである。その場合、リークは、アルフレッド大王による、*Beda* ベーダの『英国民教会史』<sup>(31)</sup>の古期英語訳<sup>(32)</sup>の中の、*Geatas* に焦点を当てる。ベーダは、8世紀ごろのノーサンブリア王国のカトリックの聖職者で、英国についての最初の歴史書である『英国民教会史』を著わした。ベーダの著作は、すべてラテン語によるものであり、9世紀末のアルフレッド大王は、それを古期英語に翻訳したのである。アルフレッド大王によるベーダの『英国民教会史』の古期英語訳の中の、本稿と関連する部分は、次の箇所である<sup>(33)</sup>。

Comon hi of þrim folcum ðam strangestan Germanie, þæt of Seaxum (ond) of Angle (ond) of Geatum. Of Geata fruman syndon Cantware, (ond) Wihtsætan; þæt is seo ðeod þe Wiht þæt ealond oneardað. Of Seaxum, þæt is of ðam lande þe mon hateð Ealdseaxan, coman Eastseaxan (ond) Suðseaxan (ond) Westseaxan. And of Engle coman Eastengle (ond) Middelenge (ond) Myrce (ond) eall Norðhembra cynn; is þæt land ðe Angulus is nemned, betwyh Geatum (ond) Seaxum; is sæd of þære tíde þe hi ðanon gewiton oð to dæge, þæt hit weste wunige.

上の古期英語訳で、*Geatas* は、*Geatum* (l. 2), *Geata* (l. 2), *Geatum*

## 30 法政大学キャリアデザイン学部紀要第6号

(1. 7) の3箇所而言及されている。もともと Geatas は名詞の複数形の主格であるが、上の記述には主格は用いられていず、3箇所の言及は、それぞれ複数形の斜格である。それぞれ、ベータの原文では、ラテン語のジュートを示す語の、Iutis、Iutarum、Iutis となっている。つまり、ベータがジュートとして記述していた箇所が Geatas の活用形で訳されているのである。その箇所について、かつては写字生の誤記によるものとされてきた。それに対して、チェーンバーズは、翻訳者の誤りとした<sup>(34)</sup>。リークは、チェーンバーズが、従来の写字生の誤りという説を批判した点には賛意を表しているが、チェーンバーズが、それを翻訳者の誤りとした点を批判し、その部分を、翻訳者の認識の現われであるとした<sup>(35)</sup>。リークは、その翻訳者の認識は、たとえ今日からすれば誤りであったとしても、アルフレッド大王の時代のヨーロッパでは、一般的な認識であったとする。リークは、9世紀末のアルフレッド大王の時代には、8世紀前後のベータの頃のジュートが、西洋中世の様々なラテン語の文献の中に見出される Getae であると考えられていたとし、従って、その古期英語訳の Geatas は、当時の認識の現われであり、ゴート、デーン、ジュートの総称であるとしたのであった。

つまり、イングランドにおいて、Getae が Goths、Danes、Jutes と同じであるという伝説が次第に浸透し、アルフレッド時代には、ベータの『英国国教会史』の Iut ジュートは、Geatas という訳語が用いられるまでになった。そのような伝説が共通認識となるのは、アルフレッド大王時代の9世紀末以降であるとし、そうであれば、『ベオウルフ』における Geatas イェアタスも、同じように、9世紀末以降の認識の所産であり、従って、『ベオウルフ』は、10世紀以降の成立としたのである。

リークの主張は極めて優れた内容を持つものであった。しかしながら、アルフレッド大王時代の『英国国教会史』の翻訳者に、Geatas について、当時の認識が反映されていたとしても、そうであるからといって、『ベオウルフ』の作者も、同じ認識を持っていたとは必ずしも言えない<sup>(36)</sup>。それが次の項で触れる、『ベオウルフ』の「フィン王の挿話」の中の Eotan によって明らかになるのであるが、リークの主張に、首肯が困難な部分があるとはいえ、『ベオウルフ』の成立を10世紀以降とする説の提示は重要であった。

## 5.

ここで『ベオウルフ』の「フィン王の挿話」<sup>(37)</sup>について考えることにしたい。「フィン王の挿話」の中の Eotan エーオタンを、『ベオウルフ』の作者がどのように認識しているかを通して、『ベオウルフ』の成立時期について考える手がかりが得られると思われるからである<sup>(38)</sup>。

「フィン王の挿話」とは、ゲルマン人の国家 Fresan フレーザンの国王 Finn フィン王をめぐる挿話である。フレーザンとはフリージアンであり、アングル、サクソン、ジュートとともに、その一部がブリテン島に移住したと考えられるゲルマン人の国家であった<sup>(39)</sup>。デネの国王フネフの妹ヒルデブルフは、フレーザンの国王フィン王の王妃となっていた。デネの国王フネフがフレーザンのフィン王の館に宿泊し、そこでフレーザンの兵士達の急襲に遭う。「フィン王の挿話」は、フネフがフレーザンの国王フィンによって悲劇的な最期を迎え、それに対してフネフの臣下がその復讐を遂げる物語である。つまりデネは、フレーザンにより、騙し討ちにあうわけであるが、その過程でエーオタンという人々が言及されている。エーオタンは、フレーザンのフィン王に近い関係の部族として登場している。そのエーオタンについては、『ウィードシース』にも言及されていて<sup>(40)</sup>、ジュートであると考えられている。

ところで、『ベオウルフ』の作者は、エーオタンがジュートであるということを知っていたと考えられる<sup>(41)</sup>。それは次のようなことから推測し得る。『ベオウルフ』の作者は、先行する『ウィードシース』をよく知っていた。『ウィードシース』には、前述のように、スカンジナビアの国家として Geatas が言及され、そしてそれと全く別個の国家として Eotan (『ウィードシース』では Ytan であるが) が、ジュートとして記述されている。それは、『ベオウルフ』の「フィン王の挿話」のエーオタンを想起させるように、フィン王のフレーザンの近隣の国家として記述されていた。つまり『ベオウルフ』の作者は、『ウィードシース』の作者と本来的には同じ認識を持っていて、エーオタンがジュートであることを知っていたと考えられるのである。そのことは、『ベオウルフ』の作者が、ジュートについて、アングル、サクソン等とともにブリテン島に渡り、アングロ・サクソン七王国を作ったゲルマン人であることも知っていたということの意味する。『ウィードシース』のアングル、

## 32 法政大学キャリアデザイン学部紀要第6号

サクソン、ジュート、そしてフリージアンは、それらのゲルマン人諸部族が、ブリテン島に移住する直前の状況であり、その『ウィードシース』の作者と『ベオウルフ』の「フィン王の挿話」における作者の認識が同じであれば、『ベオウルフ』の作者のアングロ、サクソン、ジュート、そしてフリージアンの知識も、そのようであったと考えられるからである。つまり、『ベオウルフ』の著者は、ジュートの、初期のアングロ・サクソン諸王国における重要性について知っていたのである。しかしながら『ベオウルフ』の「フィン王の挿話」では、フリージアンとジュートが記述されてはいるが、『ウィードシース』とは異なり、悪者としてのジュートが強調されている。『ウィードシース』は、作者であるウィードシースが、様々な国を訪れ、その訪れた国々を列挙しているという形で記述された詩であり、それぞれの国の関係については、記述されていない。従って、『ベオウルフ』の「フィン王の挿話」においては、フリージアン、ジュートについて、それが正確であるか否かは別にして、より詳しい記述が見出されると言えるかも知れない。『ベオウルフ』の「フィン王の挿話」の、『ウィードシース』との決定的な相違点は、ジュートとデネについてである。『ウィードシース』では、フィン王についての記述、そしてフリージアンとエーオタンの近隣関係は言及されているが、フリージアン、ジュート、そしてデネの、それぞれの関係は言及されていない。「フィン王の挿話」で言及されているのは、その三国の相互関係、そして、とりわけジュートとデネの関係である。『ウィードシース』でジュートの英雄として記述されている Hengest が、「フィン王の挿話」ではデネの將軍ということになっている。それは、明らかに『ベオウルフ』の作者による改変である。Hengest は、『ウィードシース』だけでなく、ベータの『英国民教会史』にも『アングロ・サクソン年代記』にも、ジュートの英雄として記述されているからである。しかし「フィン王の挿話」では、ジュートから英雄 Hengest が切り離されてデネの將軍とされ、ジュートは悪の存在とされている。それは、なぜであろうか。その理由は、『ベオウルフ』の成立時期と関係していると思われる。ジュートを悪の存在とし、ジュートの英雄 Hengest をデネの將軍と変えて善の存在としてのデネを強調することにより、『ベオウルフ』の作者は、デネとアングロ・サクソンの間の融和を試みたと考えられるのである。それが、ナ

イルズの言う、Anglo-Scandinavian の audience に対する配慮から来るものではないだろうか。ナイルズの主張には大変説得力があるが、文献的な根拠を見出すのが難しい。その文献的根拠の一つが、『ベアオウルフ』の「フィン王の挿話」における Eotan についての作者の取り上げ方に現われていると思われるのである。ナイルズは Hengest のみに言及しているが、Eotan 全般について、そのことはあてはまると言えよう。つまり『ベアオウルフ』は、Anglo-Scandinavian の audience に対して書かれたものであり、従って、post-Viking の時代、具体的には10世紀以後の成立であることは明らかであろう。10世紀以降の具体的にどの時代についてであるかの特定は困難であるが、はっきりしているのは、Cnut のイングランド支配の1016年、つまり11世紀前半までの間ということになるであろう。Cnut の時代には、イングランドはデンマークの支配下になり、前述のように、『ベアオウルフ』のようなデネの無力が強調される作品が実現したとは、とても想像できないからである。一方『ベアオウルフ』の写本の作成された時期に、他のいくつかの古期英語の重要な韻文についての写本である、the Exeter Book や the Vercelli Codex 等も作成されていた<sup>(42)</sup>。それらの写本の原作は、それよりもずっと以前に成立していたと思われるが、『ベアオウルフ』の場合は、写本と原作の成立が、キアナンの言う同一時期ではないにせよ、それほど年代の開きがあったとは考えられないのである。

## 6.

以上、古期英語の叙事詩『ベアオウルフ』の成立時期について、通説となっている、チェインバーズ、クレーバー等の8世紀前半説、そしてその後新たに提示されたキアナン、ナイルズ、さらには関連してリークの説について検討してきた。通説は、デーン人の侵入以前、pre-Viking age の8世紀前半、そして新たな諸説は、デーン人の侵入の終焉以降の9世紀末以降を成立時期としていた。通説の根拠にされている音韻変化については、チェインバーズ自身もそれほど重要性を付与せず、モールスバッハによる通説の提示理由の、イングランドとスカンジナビアの王室の婚姻は、一つの可能性としては成立理由と考えられるが、それを実証する文献は存在しない。Sutton Hoo の船の発見も、

## 34 法政大学キャリアデザイン学部紀要第6号

『ベオウルフ』で描かれた世界と共通するが、それがそのまま『ベオウルフ』の成立時期の確定にはつながらない。一方、新説のキアナンの説は、『ベオウルフ』がデンマークのクヌートによるイングランド支配の11世紀前半に成立したとするものであり、『ベオウルフ』が、デネを舞台として展開されるということでは、説得力を持つものであるが、『ベオウルフ』においては、デネがかならずしも賞賛の対象になっていない点からすれば、少し無理があるようにも思われる。ナイルズの説は、キアナンよりも少し以前の10世紀前半の成立説で、デーンロー地域における成立を唱える。論拠となっているのは、デーンロー地域のアングロ・サクソン人とデーン人の融和的状况が生じさせた *Anglo-Scandinavian audience* の存在で、その *audience* に対すべく、『ベオウルフ』は、デネに対して二律背反的な視点で描かれているとする。ナイルズは、その時期を10世紀前半の特に *Athelstan* 王の時代の925~950年とする。筆者は、年代についての確言は困難であるが、『ベオウルフ』におけるデネに対する二律背反的な視点というナイルズの指摘には、説得力があると考ええる。一方、リークの説であるが、中世西洋の *Getae* 伝説がイングランドに浸透して、やがてジュートも *Geatas* イェアタスと考えられるようになったというのが、リークの主張であった。ペーダの『英国国民教会史』のラテン語の *Iut* に対し、アルフレッドの古期英語訳でなされた *Geatas* という訳がラテン語 *Getae* の古期英語による翻案であったというのは、リークの主張の通りであろう。リークは、*Geatas* のイングランドへの浸透の時期の根拠に、アルフレッドの『英国国民教会史』の *Geatas* に求め、そして同じように *Geatas* が描かれている『ベオウルフ』も、アルフレッド大王の時代以降の成立としたのであった。しかしながら、同じ *Geatas* という表記が見出されるとしても、『英国国民教会史』の古期英語の翻訳者の認識と、『ベオウルフ』の作者の認識が同じであったとは、必ずしも言えない。それを示すのが、『ベオウルフ』中の「フィン王の挿話」の *Eotan* エーオタンである。エーオタンとはジュートのことで、そのジュートが『ベオウルフ』では、デネに敵対する存在として描かれている。『ベオウルフ』では、デネと *Geatas* イェアタスは友邦国家であるので、デネに敵対する国家は、イェアタスに敵対する国家でもある。そうなると、『ベオウルフ』では、エーオタンすなわちジュートと、

イエーアタスが敵対していることになる。それは、イエーアタスを、ジュート、ゴートと同一と考える『英国民教会史』の翻訳者の認識とは、全く別の認識である。『ベオウルフ』の作者は、先行する『ウィードシース』をよく知っていた。『ウィードシース』には、スカンジナビアの国家として *Geatas* が言及され、そしてそれと全く別個の国家として *Eotan* (『ウィードシース』では *Ytan* であるが) が、ジュートとして描かれ、またそれが、まさに『ベオウルフ』の「フィン王の挿話」のエーオタンのように、フィン王のフレーザンの近隣の国家として描かれていたのである。つまり『ベオウルフ』の作者は、『ウィードシース』の作者ともともと同一認識を持っていたのである。それでは、その問題と『ベオウルフ』の成立時期とどのように関係して来るかといえ、『ウィードシース』の作者と同じく正しい歴史認識を持っていた『ベオウルフ』の作者が、「フィン王の挿話」の中で、善の存在としてのデネを強調するために、デネに敵対していた *Eotan* を、悪の存在としている点である。そして、本来はジュートの將軍であった *Hengest* を、ナイルズの指摘するようにデネの將軍にしている点である。そのような改変の理由が、「フィン王の挿話」におけるデーン人に対する配慮であり、物語の本筋における、デネに対する二律背反的視点によると考えられるのである。

『ベオウルフ』は、その成立の時期について、それを確定する文献的証拠を見出すのは困難であろう。その場合、既存の文献の再検討を通して、その成立時期の解明を試みることは、依然として有力な方法である。そして、『ベオウルフ』の「フィン王の挿話」、とりわけその中の *Eotan* エーオタンが、その成立時期の確定に、一つの重要な示唆を与えるものと思われるのである。

#### [注]

- (1) Cf. Earle, J., *The Deeds of Beowulf*, Oxford University Press, 1892.
- (2) 以下、本稿では、*Beowulf* について、クレーバー版、*Beowulf and the Fight at Finnsburg*, ed. Fr. Klaeber, 3<sup>rd</sup> ed., D. C. Heath and Company, Lexington, Massachusetts, 1950. に依拠する。
- (3) 写本は、二つの写本の合本であり、前半は12世紀半ばのもの、後半は10世紀末のものとしてされている。後に本文で触れる K. S. Kiernan に写本につい

## 36 法政大学キャリアデザイン学部紀要第6号

ての詳細な言及が見出される。[注] (25)を参照。

- (4) Cf. Plummer, ed., *Venerabilis Baedae Historia Ecclesiastica Gentis Anglorum*, Oxford, 1956. 邦訳：ベータ著、長友栄三郎訳、『イギリス教会史』、創文社、1971年。J. Earle and C. Plummer, ed., *Two of the Saxon Chronicles Parellel*, 2 vols, Oxford University Press, repr. 1972. 邦訳：大沢一雄編訳、『アングロ・サクソン年代記研究』、ニューカレントインターナショナル、1991年。また、拙稿「フリースラン：その故地と移住に関する諸問題——中世初期アングロ・サクソン諸王国の民族的背景（5）」、『法政大学キャリアデザイン学部紀要』、第5号、2008年を参照。
- (5) Gildas, *De Excidio Conquestu Britanniae*, ed. Theodor Mommsen, in *MGH*, AA, vol. X III, Berlin, 1894, 1898; lateinisch-englisch von M. Winterbottom, 1978, 23.
- (6) Hodges, R., *The Anglo-Saxon Achievement*, Cornell University Press, Ithaca, New York, 1989, p.23.
- (7) J. Earle and C. Plummer, ed., *op. cit.*
- (8) B. Grohskopf, *The Treasure of Sutton Hoo*, Robert Hale, London, 1970.
- (9) *Beowulf*, l. 1202, l. 2355, l. 2914.
- (10) Gregorius de Tours, *Gregori Episcopi Turonensis historiarum libri X*, in *MGH*, *Scriptores rerum Merovingicarum*, Tom. 1, ed.. Wilhelm Arndt, Hannover, 1885. English translation: *History of the Franks*, by O. M. Dalton, Oxford, 1927. Die lateinisch-deutsch Ausgabe von R. Buchner, 1959. 邦訳：『トゥールのグレゴリウス 歴史十卷（フランク史）I』、兼岩正夫、臺幸夫訳註、東海大学出版会、1975年、第3巻、3。
- (11) Grundtvig, N. F. S., *Biowulfs Drape*, København, 1820, p. lxi.
- (12) Kraeber, *op. cit.*, Introduction, xxxix. Cf. Chambers, *op. cit.*, p. 3, pp. 381-387.
- (13) *Beowulf*, l. 107, l. 1261.
- (14) Beda (Bede). *Venerabilis Baedae Historia Ecclesiastica Gentis Anglorum*, ed., Ch. Plummer, Oxford, 1956. Cf. J. Earle and C. Plummer, ed., *op. cit.*, vol. 1, 1892; repr. 1972, p.20 (595. The Parker MS.), p.21 (596. The Laud MS.). なお、Bright, W., *Early English Church History*, 3<sup>rd</sup> ed., Oxford University Press, 1897, p.47, fn. 2. を参照。

- (15) Chambers, *op. cit.*, pp.110–112.
- (16) *ibid.*, p.332.
- (17) Klaeber, *op. cit.*, Introduction, cxiii, cxv.
- (18) Niles, J. D., *Beowulf—The Poem and Its Tradition*, Harvard University Press, 1983.
- (19) *ibid.*, p.112; Schücking, L.L., “Wann entstand der Beowulf? Glossen, Zweifel, und Fragen,” *Beiträge zur Geschichte der deutschen Sprache und Literatur*, 42 (1917), pp.347–410; “Die Beowulfdatierung; Eine Replik,” *Beiträge*, 47 (1923), pp.293–311.
- (20) Niles, *op. cit.*, p.112.
- (21) *ibid.*
- (22) *ibid.*, pp.115–116.
- (23) *ibid.*, pp.111–112.
- (24) *ibid.*, p.116.
- (25) Kiernan, K. S., *Beowulf and the Beowulf Manuscript*, Rutgers University Press, New Brunswick, New Jersey, 1981.
- (26) Leake, J. A., *The Geats in Beowulf*, Madison, Milwaukee and London, the University of Wisconsin Press, 1967.
- (27) *ibid.*, p.132.
- (28) *Widsith* in *The Exeter Book*, ed. Krapp and Dobbie, Columbia University Press, 1936, l. 58.
- (29) Gregorius de Tours, *op. cit.*, III, 3.
- (30) Leake, *op. cit.*, p.100.
- (31) 注(4)を参照。
- (32) *The Old English Version of Bede’s Ecclesiastical History of the English People*, ed. Thomas Miller, E.E.T.S., nod. 95–96, 1890.
- (33) *ibid.*, I .12.
- (34) Chambers, *op. cit.*, p.335.
- (35) Leake, *op. cit.*, pp.99–110.
- (36) 拙稿「ベータ『英国民教会史』のアルフレッド古期英語訳および『ベオウルフ』における Geatas について——Leake の見解を中心に (2)」(『異文化の諸相』、第27号、日本英語文化学会、2006年)を参照。

38 法政大学キャリアデザイン学部紀要第6号

- (37) *Beowulf*, lines 1071-1159.
- (38) 拙稿「『ベオウルフ』フィン王の挿話におけるエーオタン」（『異文化の諸相』、日本英語文化学会、第25号、2004年）を参照。
- (39) 注(5)のフリージアンについての拙稿を参照。
- (40) *Widsith*, l. 26. ジュートは与格複数形の *Ytum* として記述されている。
- (41) 拙稿「ベータ『英国民教会史』のアルフレッド古期英語訳および『ベオウルフ』における *Geatas* について——Leake の見解を中心に（3）」、（『異文化の諸相』、第29号、日本英語文化学会、2009年）を参照。
- (42) *Klaeber, op. cit.*, Introduction, xcvi.

---

**ABSTRACT****The Dating of the Composition of *Beowulf*****Michio IWAYA**

---

*Beowulf*, an anonymous English epic, was written in the early medieval era. However, the date of when it was composed is unclear and as a result, attempts to date the work have been carried on since the discovery of the manuscript. It is generally accepted that the work could not have been composed in the period from 787 to 878, a time during which the Danes invaded England incessantly. So the views of scholars are split between two choices: the pre-Viking age and the post-Viking age.

Around 1920, two of the most eminent *Beowulf* scholars, R. W. Chambers and Fr. Klaeber, both advocated dating *Beowulf* in the early eighth century, a view which has been accepted theory since then. But recently some highly original views, advocating the post-Viking age, have been presented, and the dating of *Beowulf* is now again an open question. This paper aims to investigate the old accepted theory and the newly presented ones to find a valid view concerning the date of composition. In my opinion, the episode of King Finn in *Beowulf* suggests something quite important regarding the issue of dating, and some items mentioned in *Widsith*, the oldest English alliterative poem, might also provide a clue to settling the debate.